

6月6日の午後、臼杵石仏、臼杵城跡を見て、満足し感激に耽りながら日豊本線で延岡に向かいました。日豊本線は大分から単線になります。特急とすれ違うため、通過時間を調整し、待ち合わせて、のんびりと進みます。けれども線路は山にしがみつくように張り付いています。宗太郎峠越えになると速度が落ちます。山ギリギリに走っているようで、「ぶつかっちゃうぞ」等という心配をしながら乗って行きました。

延岡駅には旧知の友人が迎えてくれました。ああ、延岡だ！35年ぶりの訪問でした。延岡と言えば、なんといっても民謡「新ばんば踊り」の歌詞にその魅力の全てが並んでいます。

〽鐘が鳴る鳴る 城山の鐘が ソナーコラセ あれは三百年 時打つ鐘よ

町の歴史をひそめて響く 歌人牧水おさない頃の 心いとしみ名歌を残す ヤートセーサートセ

〽延岡七万石 城下町 昔をしのぶ お城山 鐘の音聞きに來ならんけ ホラ ヨーイトコセー

以下、省略しますが、学校でも子どもが踊ったものでした。内藤7万石の城跡、城山の鐘、青い空、蒼い山、若山牧水、五ヶ瀬川、大瀬川の清流、アユ、そして海…延岡の美しさが詰まっている歌です。企業城下町を作った旭化成の煙突のことまであります。ところが、最後に、こう続きます。

〽日向に來たときゃ 寄って見ね 陽気がよくて 間が抜けて 三日もしたら日向ぼけ ホラ ヨーイトコセー

延岡で8年間、美しい大自然と大らかな人間に囲まれて本当に楽しく過ごしたのです。夫が赴任して、引っ越し荷物を片付けている時に、訪問して手伝ってくれたのは、これから中学生になる12歳の半ズボンをはいた少年でした。彼の動きがぎこちないので心配しましたが、やはり障害を負っていました。彼は教会が大好きで、牧師が好きで、教会を休むことがありませんでした。彼のご両

親も教会に來るようになり、お父さんは「僕は外野がいやです」と言っておられました。何かと教会に協力的でした。お母さんも友人を次々と誘い、教会の聖書の学びのグループは賑やかになりました。教会は小規模でしたが、長い信仰生活の長老の方々がしっかり守られ、また盲人の方が多く、企業の関係者も多いのが特徴でした。教会のご婦人方はいつも「遊びにおいで」と言って下さるので、見知らぬ土地ゆえ、行く所もなく、今日はこちら、明日はあちら、と教会員のお宅へ遊びに出かけたものでした。大らかでオープンでした。私たちも若かったので「若夫婦会」を作り、何組か夫婦揃って聖書を学び、大いに話し合い、よく食べ、親しい友人になりました。時々は長老の方に心配をおかけしたかもしれませぬ。その他にも、外野と称しながら、子どものためのキャンプ、運動会、クリスマス等に参加して、教会での交わりを楽しんでくださった方々もおられました。

この少年に導かれるように、ご両親は洗礼を受けました。少年は成長するとともに障害による発作を繰り返し、症状が多様になり、家族が対応するのも難しいことが多くなりました。自分の息子であっても、受容することは苦しい時があったと思います。両親はどれだけ祈ったことかと思います。

昨年、お父さんは難病で亡くなりました。葬儀に参列できませんでしたので、お母さんを慰め、共にお祈りしたいと、隠退記念旅行で訪ねることにしました。「最期には信仰だけが力でした、祈りによって平安が与えられました」とお母さんが言われました。また、少年は12+8+35の年齢になり、ホームで過ごしています。夫は彼を訪ねて行きました。穏やかに生活していて、喜び合いました。お母さんの計らいで、その夜は五ヶ瀬川河畔の、城山、愛宕山が望めるホテルに宿泊しました。